

八八艦隊海戦譜

死闘篇 1

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

扉 画 高荷義之

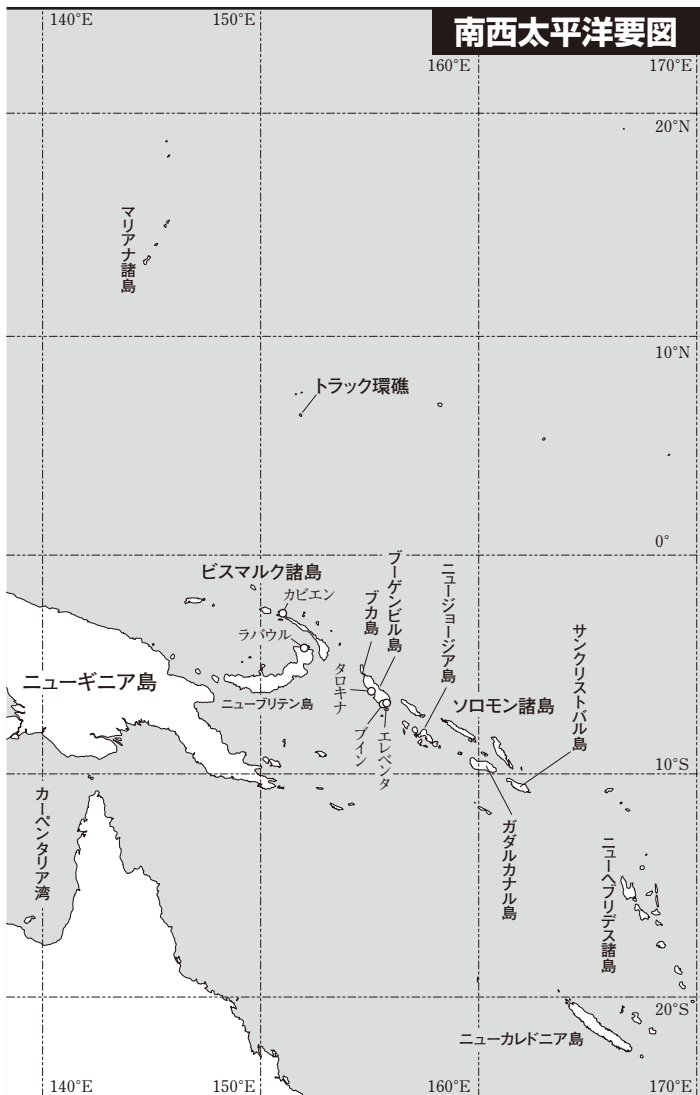
地図・図版 安達裕章

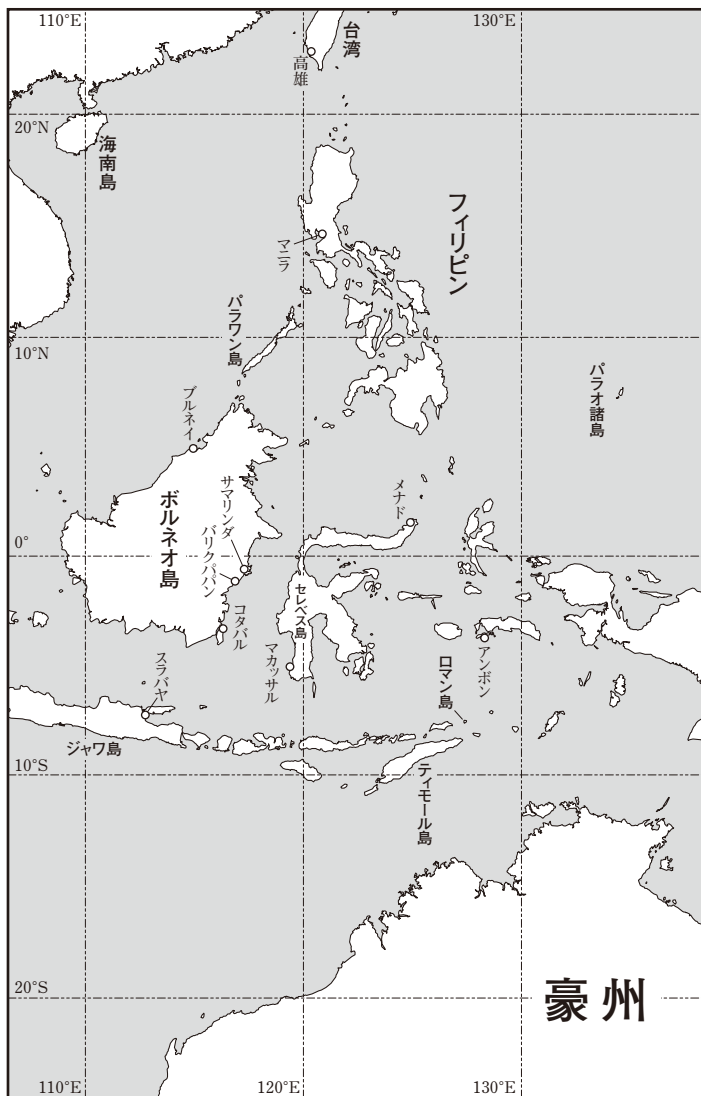
編集協力 らいとすたつふ

目次

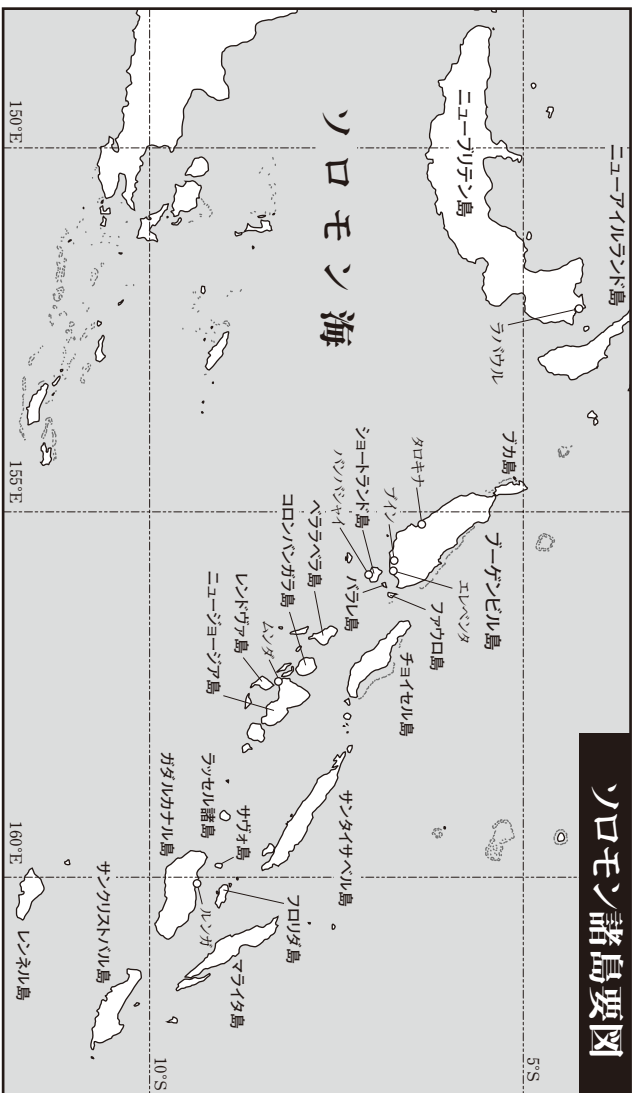
第一章	巨大なる後継者	9
第二章	ニュージョージアの尖兵	37
第三章	ブーゲンビル失陥	87
第四章	ラバウルへの迫撃	137
第五章	「大和」初陣	167
第六章	天翔る長槍	233

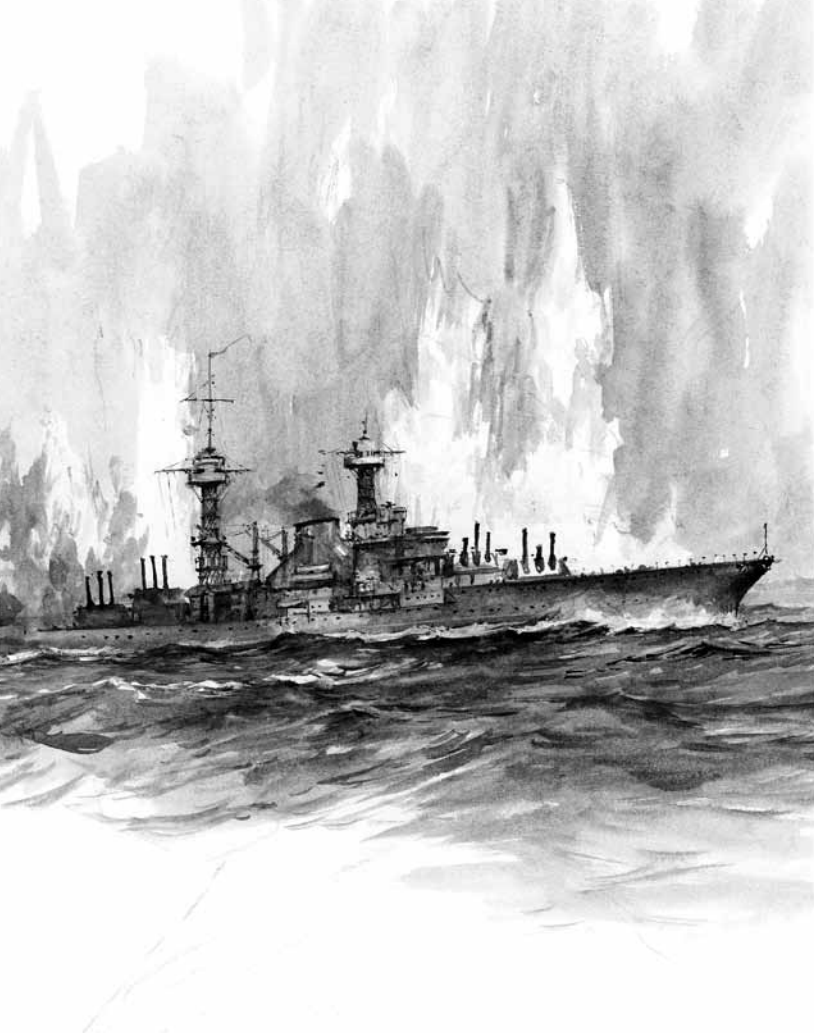
南西太平洋要図





ソロモン諸島要図





八八艦隊海戦譜

—死闘篇 1—

第一章

巨大なる後継者

1

柱島泊地に繫留けいりゅうされている巨艦は、過去に建造されたどの戦艦にも似ていなかった。

全長は、劍型巡洋戦艦よりもやや短い、横幅は異様なまでに太い。劍型を引き締まった肉体を持つ柔道家とするなら、この巨艦は大相撲おおすもうの力士、それも双葉山、羽黒山といった横綱を想起させる。

艦橋も、八八艦隊計画艦とは異なる。

「長門」から「乗鞍」までの戦艦、巡戦一六隻は、頑丈な七脚檣きやくしやうか、ごつごつした突起の多い艦橋を持つが、この巨艦の艦橋は、全般にすっきりしている。

主砲塔も、過去の日本戦艦に類似の例はない。

砲の口径は、劍型巡戦と同じ四六センチだが、砲塔は三連装であり、劍型のそれより大きい。

装備数は三基。前部に二基、後部に一基を、背負

い式に配置している。

副砲は、奥入瀬型軽巡洋艦の主砲と同じ一五・五センチ三連装砲四基だ。

他に、一二・七センチ連装高角砲六基と二五ミリ三連装機銃座多数が、天を睨む。

戦艦のみならず、巡洋艦、駆逐艦といった中小型艦艇も、航空機も、一切寄せ付けない凄みがある。

戦艦「大和」。

全長二六三メートル、最大幅三八・九メートル、基準排水量六万四〇〇〇トンの巨艦と、四六センチ主砲九門を持つ史上最大最強の巨艦。

八八艦隊計画艦の後を継ぐ、新たな帝国海軍の主力として計画・建造され、今日——昭和一七年六月二〇日に竣工したばかりの艦が、堂々たる姿を母港の柱島泊地に浮かべていた。

引き渡し式典が終わり、興奮と熱気が一旦収まった後、軍事参議官の嶋田繁太郎大将が「大和」の艦内視察を希望した。

「海軍の御意見番」であると共に、開戦時の連合艦隊司令長官であり、緒戦の大勝利の立役者となった人物だ。

嶋田が陣頭指揮を執ったトラック沖、小笠原諸島の二大海戦だけではなく、南方進攻作戦の帰趨を決定づけた第二次シンガポール沖海戦の勝利も、嶋田の決断に負うところが大きくされている。

国民には「海軍の嶋田さん」と呼ばれ、連合艦隊の長官職を退いた後も人気が高い。

大きな武勲を立てた指揮官らしく、威厳と風格をまとっている嶋田であるが、「大和」の各部を見る眼は、初めて軍艦を見学した少年のように輝いていた。

「これは、見るからに頼もしい」

初代艦長に任ぜられた松田千秋大佐が、艦の中央部に案内したとき、嶋田は感嘆の声を上げた。

艦橋、煙突等の構造物から舷側まで、かなりの幅がある。主砲弾火薬庫、缶室、機械室等、艦の枢要

部を守る装甲板の厚さをうかがわせるサイズだ。

開戦時の連合艦隊旗艦「尾張」は言うに及ばず、「大和」と同じ四六センチ砲の搭載艦である剣型巡戦の防御力をも大きく上回ることを、嶋田はかつての連合艦隊司令長官の目で見抜いたようだった。

「主要防御区画の装甲板は、決戦距離から四六センチ砲を撃ち込まれても耐えられるだけの防御力を有しています。全長は剣型より短めですが、その分被弾確率は小さくなっています。性能の割には、小さくまとめたと言えます」

「大和」の舷側を指して言った松田に、嶋田は聞いた。

「戦艦建造の流れで考えた場合、紀伊型に続くわけだな？」

「おっしゃる通りです。大和型は、四隻の建造が予定されておりますが、その四隻が紀伊型の後を継ぐことになるでしょう」

「その紀伊型も、二隻が失われてしまったが……」

嶋田は、肩を落とした。

去る五月三一日に戦われた第三次ブーゲンビル島沖海戦の結果は、呉にも伝わっている。

同海戦に参加した三隻の八八艦隊計画艦は、一隻も帰還しなかった。

戦艦「加賀」と「近江」は、米新鋭戦艦二隻との砲撃戦の末、大破着底。浮揚修理は絶望と判断され、放棄が決定。

戦艦「駿河」は、トラック環礁への帰路に敵潜水艦の雷撃を受け、魚雷四本の命中により沈没。

三隻ものの八八艦隊計画艦が失われた海戦は、過去に例がない。

「駿河」「近江」は、紀伊型戦艦の三、四番艦であり、開戦時は姉妹艦「尾張」「紀伊」と共に、嶋田が直率する第一戦隊に属していた。

トラック沖、小笠原沖の二大海戦に参加し、勝利の立役者となった艦でもある。

それだけに嶋田は、ひととき哀惜の思いを感じて

いるのだろう。

「開戦時とは言わぬが、ブーゲンビルの攻防戦に本艦が間に合っていれば、『駿河』や『近江』を失わずに済んだかもしれぬな」

遠くを見るような表情で言った嶋田に、松田は答えた。

「本艦と共に、南海の戦場に馳せ参じることができなかったのは、私も残念です」

BS作戦の開始時点で「大和」が竣工しても、ブーゲンビル島の攻防戦には間に合わなかっただろうと、松田は考えている。

戦艦のような大艦は、慣熟訓練に時間を要する。「大和」ほどの巨艦であれば、乗員がその扱いに習熟するまで、半年は必要だ。

だが松田は、敢えてそれを口にしなかった。

嶋田は真顔に戻り、上官が部下に、というより、先輩が後輩に教え諭すような口調で言った。

「今言ったことと矛盾するようだが、訓練は時間を

かけて、念入りにやらにやいかんぞ。砲術出身の君には、それこそ釈迦に説法だろうが、射撃訓練には特に力を入れて貰いたい。こちらが優勢だと思っても、直撃弾を得るまでに手間取れば苦戦を強いられるし、最悪の場合には敗北もあり得る。私はそれを、実戦の場で思い知らされたのだ。『陸奥』と『土佐』を失った、小笠原諸島沖の戦場でな」

「心得ております」

松田は、海軍兵学校を四四期で卒業した後、海軍の主流派である砲術を専門に選び、大尉の終わりまでは、もっぱら艦船勤務で腕を磨いた。

海大甲種学生の修了後は、駐米大使館付武官補佐官や軍令部員等の地上勤務が多くなったが、「大和」艦長に任ぜられる前は、「摂津」特務艦長と戦艦「日向」艦長を務めた。

「日向」の艦長に任ぜられたのは、同艦が第一次シンガポール沖海戦に参陣した後であり、英国東洋艦隊との戦いを経験する機会はなかったが、同海戦で

得られた戦訓については、戦闘詳報を熟読すると共に、「日向」の乗員たちから詳しい話を聞いている。先手を取ることの重要性は、よく理解しているつもりだ。

幸い「大和」には、期待の最新鋭戦艦ということもあり、他の戦艦で実戦経験を積んだベテランが多数配属されている。その中には、第一次シンガポール沖海戦で乗艦を失った「伊勢」「扶桑」の乗員も含まれる。

彼らの経験を生かし、共に「大和」を強い戦艦に作り上げてゆくつもりだった。

「『大和』が前線に出られるまで、およそ半年か。それまでに、戦況がどう変化しているか……」

嶋田は舷側の手すりに手をかけ、海面を眺めた。

その心眼には、遠い南方の戦場——ブーゲンビル島やラバウル、トラックが映っているのだらうと松田は想像した。

BS作戦の戦場がソロモン諸島に移って以来、戦

況は厳しさを増している。

日本軍は、ソロモン諸島のブーゲンビル島で足止めを喰らい、一連の海戦で四隻もの八八艦隊計画艦が失われた。

「大和」が最前線に出た時点で、戦争がどのような様相を呈しているか、全く予想がつかない。

とはいえ、松田は連合艦隊の作戦方針に口を出せる立場ではない。

「大和」の艦長にできることは、自分も含めて二五〇〇名に及ぶ「大和」の乗員を鍛え上げ、艦の扱いに習熟させて、一日も早く最前線に馳せ参じることだけだった。

「古賀（古賀峯一大将。連合艦隊司令長官）が消耗を避けてくれればよいのだがな」

ほそりと、嶋田は言った。

自分が今なお連合艦隊司令長官の立場にあるなら、八八艦隊の温存策を採り、「大和」が戦列に加わるまで時間を稼ぐのだが——と言いたげだった。

「『大和』がいかに強力な戦艦だからといっても、一隻だけで戦況を左右できるものでもない。他の艦艇——特に、八八艦隊計画艦と連携してこそ、この艦も十全に威力を発揮できる」

「本艦が搭載する四六センチ砲は、戦闘を有利に進める要素の一つではありますが、決定打とは言えない、と私は考えております。そのことは、昨年九月の第二次ティモール沖海戦で判明しております」

松田は、改まった表情と口調で言った。

蘭印を巡る一連の攻防戦で、掉尾を飾る戦いとなつた第二次ティモール沖海戦は、「大和」と同じ四六センチ砲を搭載している剣型巡戦三隻で編制された第三戦隊が、主役を務めた戦いだからだ。

同海戦で、三隻の剣型は、レキシントン級巡戦三隻と砲火を交えた。

攻防の性能差を考えれば、剣型が圧勝するはずだったが、第三戦隊は敵に先手を取られたこと、レキ

シントン級が正確な砲撃を放ってきたことなどから、思いがけない苦戦を強いられた。

最終的には、日本側が勝利を収めたものの、三隻の艤型は大きな損害を受け、長期にわたる戦線離脱を余儀なくされた。

松田は、同海戦について詳しく調べた結果、

『大和』といえども、無敵の存在ではない。先手を取るのに失敗すれば、敗北もあり得る」

との結論に達していた。

「そこまで研究熱心な艦長なら、戦訓を充分反映させ、本艦を最強の戦艦に仕上げてくれるだろう」

嶋田は、満足げに頷いた。

期待以上の収穫が得られた——と言いたげだった。「くれぐれも、『大和』を頼む」

2

同じ頃、トラック環礁に停泊している連合艦隊旗

艦「紀伊」の長官公室では、司令長官古賀峯一大将が重大発表を行っていた。

「BS作戦を中止する」

重々しい声で古賀が言ったとき、連合艦隊司令部の参謀たちの反応は、大きく二つに分かれた。

作戦参謀大石保中佐に代表される、BS作戦を積極的に推進していた人々は、深い失望の表情を浮かべ、BS作戦の実施に反対していた首席参謀中瀬

浜大佐、情報参謀磯崎稔中佐らは、やはり——と言いたげだった。

「今後、ビスマルク、ソロモン諸島方面では、ブーゲンビル島を最前線として守りを固める。これは、大本営の決定だ」

古賀がそう言うって着席すると、参謀長の岸福治少将がその後を引き継いだ。

「遺憾ながら、我が軍はBS作戦で兵力を消耗し過ぎた。殊に、第二次、第三次のブーゲンビル島沖海戦で、八八艦隊計画艦を四隻も失ったのは大きな痛

手だ。このまま、ブーゲンビル島の先に進撃すれば、損害は更に累加する。我が軍が致命傷を負う前に、作戦を中止するのが至当であるというのが、大本営の判断だ」

「内地からは、『大和』竣工の報せが届いています。八八艦隊計画艦のどの艦よりも強力な最新鋭戦艦です。『大和』の存在は、失った四隻を補って余りあると考えますが」

大石が異議を唱えた。

BS作戦の元になった米豪分断作戦は、大石が起案し、詳細な作戦計画を作り上げたものだ。渾身の「自信作」が中止になるとあっては、黙って従うわけにはいかなかったであろう。

『大和』が慣熟訓練を終え、戦列に加わるのは半年後だ。それまでに損害は更に増え、致命的なまでに膨れ上がっているかもしれない。『大和』が戦列に加わっても、補いがつかぬほどにな。大本営は、そのような事態になることを恐れたのだ」

「ですが——」

「遺憾ではあるが、本件は既に決定したのだ、作戦参謀。連合艦隊としては、従う以外にない」

（第三次ブーゲンビル島沖海戦が決定的だったな）

岸の言葉を聞きながら、磯崎は腹の底で呟いた。

第三次ブーゲンビル島沖海戦が終わった時点では、BS作戦で失われた八八艦隊計画艦は「赤城」のみというのが大本営の認識だった。

「加賀」と「近江」は大破着底の状態であり、浮揚修理は充分可能と主張する声は、連合艦隊司令部だけではなく、軍令部や海軍省にもあったのだ。

だが六月一〇日、トラックへの帰還途上にあった戦艦「駿河」が敵潜水艦の雷撃を受け、撃沈されたこと、艦政本部が『加賀』『近江』の浮揚修理は不可能。両艦の放棄やむなし」との結論を出したことで、大本営も、連合艦隊司令部のBS作戦推進派も勢いを失った。

BS作戦の期間中に失われた八八艦隊計画艦は四

隻。これに小笠原諸島沖海戦で沈んだ「陸奥」と「土佐」を加えれば、開戦以来の喪失艦は合計六隻になる。

大本営も深刻な危機感を覚え、BS作戦を中止せざるを得なかったのだろう。

「結局は、情報参謀が一番正しかったのかもしれない」

中瀬浜首席参謀がちらと磯崎を見やり、苦笑した。

BS作戦の採否を巡る作戦会議のとき、磯崎は、

「占領地を現在以上に拡大せず、資源地帯である蘭印の守りを固めるべきです」

と主張したが、賛同者を全く得られず、却下されている。

BS作戦の採否については、磯崎と同意見だった中瀬や戦務参謀鷹尾卓海中佐、水雷参謀有馬高泰中佐らも、「占領地の不拡大と蘭印の堅守」という主張には賛同しなかったのだ。

自分も情報参謀の意見に与し、守りを重視した作

戦案を通していけば、八八艦隊計画艦四隻の喪失はなかったかもしれぬ——と思っているようだった。

磯崎は、黙って頭を下げた。

現実には、自分の案が採択されなかった以上、今更蒸し返しても意味はない。

より重要なのは、今後の作戦展開だ。

「最前線のことに、議題を移したい」

古賀が全員の顔を見渡し、宣言するように言った。

BS作戦は完全に終わったことを、幕僚たちに認識させようとしている様子だった。

「ブーゲンビルの戦況についてですが——」

南東方面艦隊参謀長一瀬信一少将が、古賀の言葉を受けて発言した。

ラバウルに常駐し、南東方面艦隊司令長官沢本頼雄中将を補佐する立場だが、この会議に出席するため、トラックに呼び寄せられたのだ。

「現在、ブイン、バラレの両飛行場に、第二五、二六両航空戦隊が進出しており、守りを固めています。

戦力は零戦一九二機、一式艦偵一八機です。他に、シヨートランドの水上機基地に零式水偵二四機、零観一二機が展開し、近距離の索敵と対潜哨戒に当たっています」

「空襲は？」

岸参謀長の問いに、一瀬は少し考えてから答えた。
「空襲はまだありませんが、少数のB17がこれまでに五回、ブインとバラレの上空に飛来した旨、報告が届いています。おそらく、偵察でしょう」

「それは、空襲再開の前兆と推測されます。ガダルカナルの敵飛行場には、相当数のB17が集結している可能性大です」

航空参謀佐々木彰中佐の発言を受け、岸が一瀬に聞いた。

「ガダルカナルへの航空偵察は？」

「六月一〇日以降、これまでに四回実施したのですが、索敵機が全て未帰還となっています。残念ですが、索敵機は敵飛行場に接近する前に、敵戦闘機に

捕捉され、撃墜されたものと推定されます」

一瀬は、歯切れの悪い口調で答えた。

「ブーゲンビルへの航空攻撃は、いつ再開されてもおかしくない、ということだな？」

岸の言葉を受け、一瀬が頷いた。

「左様です。こうしている間にも、前線から『敵機来襲』の報告が届くやもしれません」

「できる限り早く、ブーゲンビルに増援を送る必要があります」

ほそりと言った古賀に、一瀬が言った。

「南東方面艦隊司令部としては、航空隊と合わせて、設営部隊の増援と建設用資材の補給を強く希望します。敵の重爆は非常に撃たれ強く、完全な阻止はなかなかできません。空襲の被害をゼロに留めるのは、不可能と言っている状態です」

佐々木が続けて発言した。

「一瀬参謀長のおっしゃる通りです。一旦飛行場に大きな被害を受けると、復旧までかなりの時日を

要することは、これまでの戦訓から判明しています。飛行場の機能を維持し、ブーゲンビルを守り切るためには、設営部隊を多数配置することが不可欠です」

「それは何とかしよう。私の名前で、中央に要請を出す」

古賀は大きく頷いた。

「敵艦隊の動向はどうでしょうか？ 第三次ブーゲンビル島沖海戦以降、新たな敵艦隊がブーゲンビルの航空基地を襲う気配はありませんか？」

今度は、中瀬が一瀬に質問した。

「今のところ、敵の艦艇が我が軍の索敵網にかかったことはありません。南東方面艦隊司令部では、敵艦隊はガダルカナルへの物資輸送とその護衛に専念しているのではないかと睨んでいます」

「現状では、米軍にもブーゲンビルに水上部隊を送り込む余裕はないのかもしれない。先の実戦で初見参した米軍の新鋭戦艦は、ミシガン級というクラス

名を持つことが、捕虜の供述から判明している。我が軍は、そのミシガン級一隻を沈め、もう一隻に大破と判定される損害を与えた。頼みの新鋭戦艦が使えない状況では、米艦隊も攻勢には出られない」

岸が、思案顔で言った。

「ミシガン級が一定数揃うのは、いつ頃になるかね？」

古賀の問いに、磯崎が即答した。

「軍司令部第五課の調査と分析によれば、ミシガン級は現在までに五隻が竣工しているとのこと。うち二隻ないし三隻は、現在慣熟訓練中と推測されますので、今年の末までには、四隻程度のミシガン級が前線に出現すると考えられます」

「その頃には、『大和』も前線に出ているな」

古賀が微笑を浮かべた。

「大和」があれば、ミシガン級など恐れるに足りぬ、と言いたげだった。

「今申し上げたことは、あくまで戦艦に限っての話

です。ミシガン級が一定数揃う前に、新型の巡洋艦、駆逐艦が多数、前線に登場すると考えられます」

磯崎は、注意を喚起した。

第二次ブーゲンビル島沖海戦では、「赤城」「愛宕」が、米軍の新型軽巡ハートフォード級と交戦し、集中砲火を浴びた「赤城」が沈没している。

夜間の接近砲戦であれば、巡洋艦が戦艦、巡戦に勝つこともあるのだ。

米軍はミシガン級の建造と並行して、ハートフォード級の大量建造を進めており、昭和一七年中に一〇隻以上が配備されるという。

重巡にしても、従来のニュー・オーリンズ級、ポートランド級より強力な新型艦の建造が進められているとのことだ。

これらの艦に対しても、十分な警戒が必要です——と言つて、磯崎は説明を終えた。

「『赤城』を沈めた新型巡洋艦か。第八艦隊の手に余るやもしれぬな」

古賀が、ちらと一瀬を見やつた。

第八艦隊は、南東方面艦隊隷下の水上砲戦部隊で、大川内伝七中將が指揮している。

麾下の艦艇は、第六戦隊の高速戦艦「金剛」「榛名」「霧島」「比叡」、第七戦隊の重巡洋艦「栗駒」「戸隠」「鞍馬」「生駒」に、第四水雷戦隊の軽巡と駆逐艦、第四航空戦隊の空母二隻と水上機母艦一隻、第二一戦隊の雷撃艇母艦三隻と高速雷撃艇「瀑龍」だ。

四〇センチ砲搭載艦の「赤城」すら沈めた敵に、第六戦隊の金剛型戦艦や、第七戦隊の栗駒型重巡が勝てるだろうか——と、古賀は危惧している様子だった。

「南東方面艦隊としましては、現有兵力をもって最善を尽くす以外にありません」

静かな声で、一瀬は言った。

帝国海軍軍人たる者、与えられた戦力に文句を言うつもりはない。どれほどの強敵であろうと、手持

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。